

馬若瑟 (Prémare) 『漢語劄記 (Notitia Linguae Sinicae)』 第二部訳注 (I)

千葉謙悟訳

〈前言〉

2004年から2013年にかけて断続的に『或問』誌上で *Notitia Linguae Sinicae* の第一部口語篇の訳注を掲載したが、このたび文語篇についても翻訳を開始することとした。

*Notitia* の訳注を続けている間にプレマールについての研究も進み、中国では李真『馬若瑟《漢語札記》研究』(商務印書館,2014)なる专著が出た。プレマールについての专著としてはおそらく Lundbaek の *Joseph de Prémare* (1991) 以来であろうし、*Notitia* に焦点を当てたものとしてはおそらく最初の研究であろう。中国では他にも *Notitia* を扱った論文を散発的に目にする。

それでもなお、基礎研究として翻訳を公開することには意味があると考え。というのは、多くの研究がラテン語排印本(あるいはそのもととなった草稿でも良いが)を参照せず、J. G.ブリッジマンによる *Notitia* の英訳本のみによって *Notitia* を論じているからである。訳者が以前から指摘するように、英訳本をそのまま扱うことは危険である。必ずしもラテン語原文に忠実な翻訳でないことは過去の本連載からも明らかであろう。従って、ラテン語からの翻訳を文語篇についても進め、*Notitia* 全訳を目的として連載を再開することとした。

また、訳者が「馬若瑟《中国語文註解 (Notitia Linguae Sinicae)》例句來源考」『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』(好文出版、2013)で指摘したとおり、*Notitia* が含む大量の例文はプレマールやそのインフォーマントの創作ではなく、文学作品からの引用が大半を占める。従って *Notitia* の例文を18世紀官話の直接の反映と見ることは危険である。このことを踏まえ、例文の出典についても今回の翻訳では一々注記することとした。プレマールの読書遍歴を理解する上でも有用であろう。

*Notitia* は19世紀になって Joseph Edkins の *A Grammar of the Chinese Colloquial Language* (1857) が現れるまでは中国語研究の最高峰であったといつてよい。*Notitia* の全貌が広く知られるようになったのは1830年代になってからとはいえ、実はプレマールのこの著作は19世紀の中国語研究に巨大な影響を与えたのである。レミュザ、ピチューリン、エドキンスといった名だたる学者はみな *Notitia* を参照している。ゆえに、*Notitia* については今後さらに検討が加えられるべきであり、本連載がその一助となれば幸いである。

今回の連載に当たって、本書の日本語訳名を『中国語文註解』から『漢語劄記』に改めた。

中国ではすでにこの訳名が通用していることによる。凡例はおおむね前回の連載のものを踏襲しているが一部を改めた。

### ＜凡例＞

- ・底本は何群雄編（2002）『初期中国語文法学史研究資料 プレマールの『中国語ノート』』三元社を用いた。これはフランスのパリ国立図書館蔵本の影印本（Anglo-Chinese College 1831）である。
- ・本文中に用いられた漢字、ローマ字標音は誤植も含めできるだけ忠実に記した。右から左に向かって書かれている漢字文字列は左から右に進むよう改めた。本文中に用いられた漢字はすべて「」でくくり、訳文と区別した。漢字に付されたラテン語訳については“ ”を用いて示す。
- ・中国語がローマ字でのみ書かれている部分はその表記を記し、その直後に〈〉を付して推定される漢字を加えた。
- ・声調記号や気音の表示がなかったりそれらが誤っているように見えたりと、ローマ字表記には問題が頻出する。本文では原則としてローマ字標音について注記しないが、特に注意を要する場合にのみ（sic）の記号を付した。
- ・訳文において日本語を補う必要がある場合には適宜[ ]で示した。
- ・英訳本において削除されている箇所は下線で示す。原文にはないにもかかわらず、意味を明確にするため以上のフレーズや文が追加されていると判断される部分については注で指摘した。
- ・対照のため用いた英訳本は *The Notitia Linguae Sinicae of Premare. Translated into English by J. G. Bridgman. Canton: Printed at the Office of the Chinese Repository, 1847* である。

### 注記

この第二部では初学者はもはや対象としない。そこで私は声調を記すことを徐々に省いていくが、私は決して中国の文字をラテン語の文字で表すことが必要だと信じていないわけではない。[だが]この著作の第一部を一度よく学ぶ者はみな、そうした助けを絶対に必要とする、というようなことはないだろう。

## 第二部

### より高等な書物の文体における中国語の語法について

主に中国の書物について言及した序章において私は少なからぬことを述べたので、それを何度も参照することは有用であろう。というのは、ここではもう[それらに]深く立ち入ることはしないからである。

私のこの著作の第二部を五つの章に分かつ。第一章は、第一部では言及しなかった文法と句法とについて、かなり簡略に説明する。第二章は、この言語固有の特質が最も良く現れているところの小詞および<sup>1</sup>互いに区別される句についての研究より成る。第三章では様々な文体と、書かれるべき最良の文体について述べる。第四章は多くの名言や格言を説明する。第五章は優美なる諸作品からのさまざまな抜粋を集めた。

## 第一章 書物に関する文法と句法とについて

私は、以下のことを知らない限り、中国の諸作品の真の意味は把握しえないだろうと再度忠告する。つまり、第一に、現れたフレーズの中で動詞が述べられる時、一体どの字がそれらを表しているのか、即ち、よくあることだが、どの字が省略されているのか。第二に、何が動詞の主語なのか、つまり[主語が]述べられているのかいないのか。第三に、何が動詞の目的語なのか。第四に、名詞同士<sup>2</sup>がラテン語“聖なる神”、“ペテロの書”<sup>3</sup>のごとく、どのように相互に関連しているのか。ひとたびこれらが注記されれば、残っている諸字について、単なる小詞なのか、副詞なのか、他の何か[中国語に]固有のものなのか、理解するのは容易である。<sup>4</sup>

中国語の<sup>5</sup>文法と句法に関わるものは、この作品の第一部で既に十分に幅広く説明したし、この[第二部の]すべてはより多くの、より荘重な文体について扱うので、そうした無価値なものどもには私は今や深く立ち入ることはしないものの、書物の[文体に]固有のことについては若干の節で手短かに述べるだろう。

### 第一節

多量であることを示す語は数多くあるが、それらに共通の用法というものはなく、あるものは[主語の]後ろに置き、あるものは[主語の]前に置かねばならない。「皆」kiāi、「俱」kiū、「咸」hièn、「都」toūは[主語に]後置されねばならない。

1. 「皆」kiāi “みな”。例えば「四海之内皆兄弟也」<sup>6</sup>ssée hòi tchī nuéi kiāi hiōng tí yè “全世界に

<sup>1</sup> 英訳本ではここに「さまざまな言い方における」という一節が加わる。

<sup>2</sup> 英訳本では「名詞と名詞、あるいは名詞と形容詞」とする。以下のラテン語の例を見るに英訳本の方が親切な言い方であろう。「聖なる神 (Deus Sanctus)」は名詞と形容詞、「ペテロの書 (liber Petri)」は名詞と名詞の例だからである。

<sup>3</sup> 英訳本は「ピーターの息子 (son of Peter)」とする。

<sup>4</sup> 英訳本はこの一文を「これらの点が解決されると、残りの字について我々が難しさを覚えることはないだろう。というのは、それらは当然ながら[あれらに比べれば]重要ではない品詞に属するからである」と訳す。

<sup>5</sup> 英訳本では「口語と書面語に共通する」という一節が加わる。

<sup>6</sup> 『論語』顔淵。

おいて皆が兄弟である”。「三尺童子皆知可惡」<sup>7</sup> sān t'chī t'ông tseè kiāi tchī k'ò óu “すべての小さな子供が、これは憎むにふさわしいと知っている”。「人皆曰予知」<sup>8</sup> gīn kiāi yuē yū tchí (sic) “全ての人が自分は知っている」と述べる”。あなたがた[ヨーロッパ人]が「皆人曰」というのはまことによろしくない。

2. 「俱」 kiū はほぼ「皆」に同じである。莊子は優美に語った、「人之生也與憂俱生」<sup>9</sup> gīn tchī sēng yè, yū (sic) yeōu kiū sēng と。もし簡単に言うのならば、「人與憂俱生」だが、生命力や力強さの感覚が多く失われてしまうので雄弁さを妨げるから、そこで[このように]言うのである。

“人が生まれる時は、何の抵抗もなく、辛苦や辛抱の側へ生まれてくるのである<sup>10</sup>”。長い間[中国語を]使った後によろやく、あなたはここで「俱」 kiū を使うことが「皆」 kiāi よりも良いということに気づくだろう。Chu-king<書経>には「予及汝皆亡」<sup>11</sup> yū kī jū kiāi vāng “私は汝と共に滅ぶであろう”<sup>12</sup>とある。<sup>13</sup> Sun-tsee<荀子><sup>14</sup>や註釈 Gě-kiang<日講>には、他の箇所では「舉」 kiū という字が「俱」 “すべて” と全く同じ意味で得られる。<sup>15</sup>

3. 「咸」 hiên. 例えば「萬國咸寧」<sup>16</sup> wán kouē hiên nīng “世界の全ての王国が平和を享受している”。

4. 「都」 toū. “すべての人”は「都人」 toū gīn とは言わず、「人都」 gīn toū である<sup>17</sup>。Hoai-nan-tsee<淮南子>は、例えば「都不可得」<sup>18</sup> toū pou k'ò tē “この全ては持つことができない”と言ったが、この文は[「都」の]前において[主語となるものどもに]言及し、次いで[中国語の]通常の習慣に従い「都」 toū によって[主語を]一括しているのだ。

「衆」 tchóng、「諸」 tchū、「庶」 chú、「多」 tō は[主語の]前に置かれなければならない。

1. 「衆」 tchóng “すべて” “とても多い”。莊子は言った、「衆技衆矣」<sup>19</sup> tchóng kī tchóng y “全

<sup>7</sup> 歐陽修「魏梁解」。

<sup>8</sup> 「中庸」七章。以下、「中庸」の章表示は章句本による。

<sup>9</sup> 『莊子』至樂。

<sup>10</sup> 英訳本では「人が生まれる時はみな同じだ」と訳す。

<sup>11</sup> 『書経』湯誓。

<sup>12</sup> 英訳本では「私は汝と共に滅びよう」と意志的に訳す。

<sup>13</sup> 英訳本ではここに「しかしここでの kiái 「皆」は単に“すべて”を意味するのではなく、孟子はこの一節を引用する際「皆」の代わりに kiái 「偕」「～とともに」を用いている」という、原文にはない一文を加える。

<sup>14</sup> 英訳本は「孫子」とするが誤。

<sup>15</sup> 例えば『荀子』不苟「故君子不下室堂，而海内之情舉積此者，則操術然也」。

<sup>16</sup> 『易経』乾。

<sup>17</sup> 英訳本では「“すべての人”は「都人」 toū gīn という」としており、誤りである。

<sup>18</sup> 『淮南子』には「都不可得」の句はない。早期の用例では後漢の支婁迦讖『道行般若経』摩訶般若波羅蜜道行品第一に「都不可得見、亦不可知處處」として見える。

<sup>19</sup> 『莊子』在宥。なお英訳本は「枝」に作る。

ての人が互いに高め合う<sup>20</sup>”と。「衆説紛紛」<sup>21</sup>tchóng chouë fèn fèn “すべての意見が互いに混乱し入り交じっている”。Chu-king<書経>では「有」yeoù を加え、次いでさらに「咸」hiên が後続する。すなわち「濟濟有眾咸聽朕命」<sup>22</sup>tì tì yeoù tchóng hiên t'ing tching míng あるいは「嗟爾萬方有眾明聽予一人誥」<sup>23</sup>tsie èll wán fāng yeoù tchóng míng t'ing (sic) yū y gín kaó または「嗚呼西土有眾咸聽朕言」<sup>24</sup>ōu hōu sī t'òu yeoù tchóng hiên t'ing (sic) tchín yēn。この三つの文はほとんど同じであり、意味は“おお、面前で満員の汝らよ、ともに私の命を聞け”。文体の力に徐々に気づくため、それらのどこが異なっているのかに注意されたい。「師」Ssē も同じく「衆」tchóng に近い。「以有九有之師」<sup>25</sup>y yeoù kieoù yeù tchī ssē “彼が九つの領域の群衆を所有しますように”。すなわち“彼が全世界の人々を統治しますように”。

2. 「諸」tchū。例えば「諸説」tchu chouë “すべての意見”。「諸儒」tchū jū “すべての文人”。「諸家」tchū kiā “すべての学派の哲学者”。「諸子」tchū tseè “すべての哲学者”。「諸侯」tchū héou は元々貢納する王侯すべてを指すが、この二字は権威ある人を表すよう用法が拡大していった。

3. 「庶」chú。例えば「庶士」chú sseé “すべてのマンダリン”。「自天子至於庶人」<sup>26</sup>tsée t'ien tseé tchí yu chú gín “皇帝自身から全ての人々まで”。

4. 「多」tō “多数の”。例えば「爾多士」<sup>27</sup>èll tō sséé “おお、汝ら面前のマンダリンたちよ”。「爾多方」<sup>28</sup>èll tō fāng “おお、あらゆる地域から集まった汝らよ”。同じ意味で、Chu-king<書経>は「僉」tsiēn を置く。例えば「僉曰」<sup>29</sup>tsiēn yuè “すべての人々が一斉に言った”。

いくつかの名詞は群衆を指す。例えば「民」mín “人々”。「天祐下民」<sup>30</sup>t'ien yeóu hiá mín “天は下層の民を助ける”。「羣」ki'ún “群れ”。「羣龍」<sup>31</sup>ki'ún lông “すべての龍”。同様に、多くの数[を表す]には「四」sséé “4”、「九」kieoù “9” はむろんのこと、「兆」tcháo、「億」y、「千」ts'iēn、「萬」wán が用いられる。例えば「萬方」wán fāng “あらゆる場所”。「萬民」wán mín “すべての人々”。「四海」sséé hòi “すべての海”。「四方」ssé (sic) fāng “あらゆる場所”。「四凶」<sup>32</sup>sséé hiōng

<sup>20</sup> 英訳本では「皆ができることは皆が同意する」と訳す。

<sup>21</sup> 英訳本では「紛紛」を「紛紜」に作る。

<sup>22</sup> 『書経』大禹謨。

<sup>23</sup> 『書経』湯誥。

<sup>24</sup> 『書経』泰誓中。

<sup>25</sup> 『書経』咸有一徳。

<sup>26</sup> 『孝経』庶人章。

<sup>27</sup> 『書経』多士など。

<sup>28</sup> 『書経』多方など。

<sup>29</sup> 『書経』堯典など。

<sup>30</sup> 『書経』泰誓上。

<sup>31</sup> 『易経』卷一・乾

<sup>32</sup> 『左伝』文公伝十八年。

“あらゆる悪<sup>33</sup>”。「九州」kieòu tcheōu または「九有」kieòu yeòu “全世界”。

普遍的なことは、二つの否定辞によって明示される。例えば「無不」voù poũ あるいは「莫不」mò poũ “～なものはない”、“すべてが～”、即ち“すべて”。間に関係詞「所」sò が挿入される。「無所不能.無所不知.無所不在」voù sò poũ nêng, voù sò poũ tchī, voù sò poũ tsái “彼らはすべてのことができ、すべてのことを知り、あらゆる場所にいる”。

最後に、[対象となる]あるものについて比喩詞を用いることができる。例えば「如林」jù lín “森の木々のようだ”。「如山」 “山のようだ”。あるいは jù を略して「人山人海」<sup>34</sup>gîn chān gîn hài “人の山々と人の海”、即ち “山の峰や海の潮のようにぎっしり詰まった人々”。

## 第二節

第一人称はたくさんの形式によって表される。1.かつては誰でも「朕」tchín “私”とすることができた。Tsin-chi-hoang<秦始皇><sup>35</sup>がそれを皇帝のみがふさわしいものとするよう望んだのである。Chu-king<書経>では、王は自らについて語るのに「予一人」<sup>36</sup>yü y gîn “一人の人間たる私” または「予小子」<sup>37</sup>yü siaò tseè “小さい子供である私”と云う。Tso-chi<左氏>などでは、貢納する王たちは「寡人」kouà gîn あるいは「寡仁」kouà gîn “私”という。多くの箇所、老人たちは「老夫」lào fōu “私”という。臣下たちは自らを「臣」t'chîn、学生たちは「門生」mên sēng などと呼ぶ。

2.「我」ngò は古代の書物においてよく現れる。孔子は言った、「我非生而知之者」<sup>38</sup>ngò fēi sēng èll tchī tchī tchè “私はそれを私の誕生の時から知っていたのではない<sup>39</sup>”と。「之」tchī という字は、特にこの書 Lun-yü<論語>においては、徳、知、善などを指す。同様に、孔子は言う、「我未見好仁者」<sup>40</sup>ngò oüéi kién hào gîn tchè “私は今まで徳を愛するものを誰も見ていない”と。彼の弟子の一人<sup>41</sup>が言う、「我不欲人之加諸我也」<sup>42</sup>ngò poũ yǒ gîn tchī kiā tchū ngò yè “私は、私が真の私であるよりもよく言われるようなことを好まない”と。

3.「吾」ngòu もよく現れる。孔子は言う、「吾十有五而志於學」<sup>43</sup>ngòu chě yeòu òu èll tchí yü hiǒ

<sup>33</sup> 英訳本はこれを「一団の全員」と訳す。

<sup>34</sup> 『水滸伝』51回など。

<sup>35</sup> 英訳本では四字「秦始皇帝」とする。

<sup>36</sup> 『書経』湯誓など。

<sup>37</sup> 『書経』大誥など。

<sup>38</sup> 『論語』述而。

<sup>39</sup> 英訳本では「私は生まれながらに賢者だったのではない」と訳す。

<sup>40</sup> 『論語』里仁。

<sup>41</sup> 子貢のこと。

<sup>42</sup> 『論語』公冶長。

<sup>43</sup> 『論語』為政。

“私は15歳で私の全てを徳の研究に捧げた<sup>44</sup>”と。曾子は言う、「吾日三省吾身」<sup>45</sup>ngôu gě sǎn sìng ngôu chīn “私は日々自らを三つの点について反省し、ただちにそれを語る”と。意味は以下のものである。すなわち“私は日に三回自らを反省する”。

4. 「予」 yǔ. 「天生徳於予」<sup>46</sup>t' iēn sēng tē yǔ yǔ 孔子は求めて、“天が私の中にある徳を生み出すように”と[言った]<sup>47</sup>。「予始愛之」<sup>48</sup>yǔ chī ngái tchī “私はその時その本を愛した<sup>49</sup>”。[それは]Ngheou-yang-sieou<歐陽修>が求めていたものである。「余」も「予」に同じである。Tchouang-tsee<莊子>は言った、「來余語如」<sup>50</sup>lái yǔ yǔ jù “来なさい、そうすれば私はあなたに教えるだろう”と。

5.[一人称代名詞の代わりに]しばしば自分の固有名を利用する。孔子は「丘」k'ieōuのように呼ばれている。同様に、孔子は言う。「丘也幸苟有過人必知之」<sup>51</sup>k'ieōu yè híng, keou yeou kouó, gín pī tchī tchī “私は本当に幸せだ。もし私が誤ったら、全ての人がすぐにそれを知るのだから<sup>52</sup>”。Sieōu<修>と呼ばれている Ngheou-yang<歐陽>は言う、「奚取於修焉」<sup>53</sup>hī tsù (sic) yǔ sieōu yēn “他人が私から何かを学ぶのならば、私は誰から学ぶのか?<sup>54</sup>”と。しばしば、固有名[の代わりとしてそ]の箇所に「某」meou という字を置く。

6.これらの文人たちの書簡においては、我々がヨーロッパでやるように「僕」pou “あなたのしもべたる私”という。自分の学識について触れ、自身の考えを述べるときは、へりくだって「愚」yǔ “天賦の才に極めて乏しい私”という。

7.こ[こに挙げるところ]の代名詞はフランス語の小詞 on といくらか対応し、特定の人称を指さず、時々“我々 (noster)”の代わりに置く<sup>55</sup>。例えば「我国朝」ngò kouě tch'aó “我々のこの王家”。「我皇上」ngò hoáng chàng “我々の皇帝”。これは Chu-king<書経>における「奚予后」<sup>56</sup>hī

<sup>44</sup> 英訳本では「私は十五歳の時に学び始めた」と訳す。

<sup>45</sup> 『論語』學而。

<sup>46</sup> 『論語』述而。

<sup>47</sup> 英訳本では「天は私に徳を与えた」と訳す。

<sup>48</sup> 歐陽修「本論」下。

<sup>49</sup> 英訳本では「私は初めそれを喜んだ」と訳す。引用の前後は「昔荀卿子之説，以爲人性本惡，著書一篇以持其論。予始愛之，及見世人之歸佛者，然後知荀卿之説謬焉」とあるので、どちらの訳でも通じはする。

<sup>50</sup> 『莊子』在宥。

<sup>51</sup> 『論語』述而。

<sup>52</sup> 英訳本では孔子以外の者の発話と解し、「孔子は本当に幸せだ。もし彼が誤ったら、全ての人がすぐにそれを知るのだから」と訳す。

<sup>53</sup> 歐陽修「答吳充秀才書」。

<sup>54</sup> 英訳本では「どうしたらものごとを修から学べるのか」と訳す。

<sup>55</sup> 英訳本では「三つの人稱のどれをも指さず、人間一般を示す」と訳す。

<sup>56</sup> 『書経』仲虺之誥。本来は「奚予后」だが英訳本もラテン語版と同様「奚」に作る。

yú héou “我々は我々の王を待ち望む” のようである。

第二人称は少なからず異なった形で現れる。1. 臣下たちがその皇帝に話しかけるときは「皇上」hoàng chàng、「皇帝陛下」hoàng tí pí xià といい、あるいは満州人であれば「主子」tchù tsee という。対して、皇帝は王国の大臣たちを「卿」<sup>57</sup>k'ing と呼ぶ。他の種類は、[本書の]第一部にある。

2. 「爾」èl は Chu-king<書経>や他の古い書物によく現れる。「非爾所及」<sup>58</sup>fēi èl sò kǐ “このことは君の力を超えている<sup>59</sup>”。「惟我與爾有是夫」<sup>60</sup>ouèi ngo yū èl yeou ché fou “私と君だけがこれを持っている”。

3. 「汝」ju はまことによくある語である。Chu-king<書経>は言う、「來禹惟汝賢汝惟不矜」<sup>61</sup>lái yù ouèi ju xián, jù ouèi pǒ kīn “近くに寄れ、禹よ、汝だけが賢く、汝だけが自らを誇らない”と。Tchouiang-tsee<莊子>は言う、「汝不知夫養虎者乎」<sup>62</sup>jù pǒ tchī fou yàng hòu tchè hóu (sic) “君は虎を飼うという彼らの習慣を知らないのか?”と。

4. Tchouiang-tsee<莊子>によれば、「汝」jù と全く同じ意味で「女」jù (sic)、「如」jù (sic)、「若」jǒ もある。例えば「吾語若」<sup>63</sup>ngou yù jǒ または「余語女」<sup>64</sup>yú yù jù または「余語如」<sup>65</sup>yú yù jù “私は汝に言う”。

5. 「子」tseè という字がよく使われる。例えば「吾子以為奚若」<sup>66</sup>ngou tseè y ouèi hí jǒ “そのことについて何が汝に見えるのか? <sup>67</sup>” 莊子は小魚に問うてそれを何か高名な哲学者であるかのように「子」tseè と呼ぶ<sup>68</sup>。教師たちは学生たちを「小子」siaò tseè “小さい子供たち”と呼ぶ。

<sup>57</sup> 原文ママ。英訳本では「卿」に作る。

<sup>58</sup> 『論語』公冶長。

<sup>59</sup> 英訳本は「お前は対抗できるような人ではない」と訳す。

<sup>60</sup> 『論語』述而。

<sup>61</sup> 『書経』大禹謨。『書経』原文は「來、禹。降水徹予、成允成功、惟汝賢。克勤于邦、克儉于家、不自滿假、惟汝賢。汝惟不矜」であり、プレマールの引用にはかなりの省略がある。

<sup>62</sup> 『莊子』人間世。

<sup>63</sup> 『莊子』人間世。

<sup>64</sup> 『莊子』在宥。

<sup>65</sup> 現行の『莊子』のテキストにこの句はないようである。

<sup>66</sup> 『莊子』齊物論。

<sup>67</sup> 英訳本は「あなたはどう思われますか」と訳す。

<sup>68</sup> この齊物論のエピソードは「瞿鵲子」と「長梧子」の間答であり莊子と魚ではない。莊子が魚に「子」と呼びかけるのは外物篇の莊子と監河侯とのエピソードである。「莊周家貧，故往貸粟於監河侯。監河侯曰「諾。我將得邑金，將貸子三百金，可乎」莊周忿然作色曰「周昨來，有中道而呼者。周顧視車轍中，有鮒魚焉。周問之曰「鮒魚來！子何為者邪」對曰「我，東海之波臣也。君豈有斗升之水而活我哉」周曰「諾。我且南遊吳、越之王，激西江之水而迎子，可乎」鮒魚忿然作色曰「吾失我常與，我無所處。吾得斗升之水然活耳，君乃言此，曾不如早索我於枯魚之肆！」」



「小子進余語如」<sup>69</sup> *siaò tseè tsín, yū yu ju* “わが子たちよ、入ってきなさい。私はお前に言おう”。孔子は言う、「二三小子」<sup>70</sup> *éll sán siaò tseè* “わが子たち”と。「二三」*éll sán* は“2, 3”であり、不定の数、複数ものについて話していることの印である。Chu-king<書経>では、王が兵士たちを「夫子」*foū tseè* と呼び、以下のように彼らを鼓舞する。「最哉夫子夫子最哉」<sup>71</sup> *tsouí tsāi foū tseè, foū tseè tsouí tsāi* “征け、気高き戦友たちよ、男らしくあれ”。

6. 書簡<sup>72</sup>では洗練された呼びかけが多い。即ち「足下」*tsoū hià* が[他よりも]多く現れる。Ngheou-yang-sieou<歐陽修>は言う、「安足為足下所取信哉」<sup>73</sup> *ngān tsoū ouēi tsoū hià sò t'sù sín tsāi* “あなたから信用を手に入れようとする私は何者でしょうか？”と。この例において、始めに置かれた字「足」*tsoū* は“十分な”“足りている”を意味し、「不足信」*poū tsoū sín* “これは十分に信用できるものではない”のように言う。続く「足」は“足”を意味し、「陛下」*pí hià* “皇帝たるあなた”というごとく「足下」*tsoū hià* “主人たるあなた”のように言う。我々に多くの優位、あるいは威厳、あるいは知恵を与えるような、我々が賞賛したい人々を呼んで「老夫子」*laò foū tseè* あるいは「老大人」*laò tá gín* あるいは「老先生」*laò siēn sēng* のようにも言う。

第三人称も幅広い。1. 「是」*ché* “これ”。<sup>74</sup> 例えば「於是」*yū ché* “その時” “丁度そこで” “この状況下において”。「是以」<sup>75</sup> *ché y* “これによって” “それゆえに” など。「當是時也」<sup>76</sup> *tāng ché chē yè* “その時にあって”。「小人反是」<sup>77</sup> *siaò gín fān ché* “不正な人々はこのようではなく、全く逆のことを行う”。2. 同じ意味で、「時」*chē* が用いられるが、[他の字より使われるのは]稀である。元来「時」は“時間”を意味する。3. 「斯」*ssē* は例えば「知斯三者」<sup>78</sup> *tchī ssē sán tchè* “この三つのことをよく知る人”。4. 「之」*tchī* は動詞の目的語<sup>79</sup>としてよく現れる。「知之」*tchī tchī* “これを知る”。5. 「諸」*tchū* は例えば「不識有諸」<sup>80</sup> *pou chí yeòu tchū* “これであるかどうか/こ

<sup>69</sup> 『莊子』天運。ただし『莊子』原文は「小子少進。余語汝」である。

<sup>70</sup> 『論語』先進など。ただしいずれも「二三子」の形であり「二三小子」のフレーズは見いだせなかった。

<sup>71</sup> 『書経』牧誓。ただし引用中の「最」は本来「勗」。英訳本もラテン語版と同様「最」に作る。また『書経』本文は「夫子勗哉。不愆于四伐、五伐、六伐、七伐，乃止齊焉。勗哉夫子。尚桓桓，如虎、如貔、如熊、如罴，于商郊」であり、これに従えば引用は「夫子勗哉勗哉夫子」であるべきだろう。

<sup>72</sup> 英訳本では「中国語の書簡」とする。

<sup>73</sup> 欧陽修「與荊南樂秀才書」。

<sup>74</sup> 英訳本ではさらに「彼、彼女、それ」という訳も加わる。

<sup>75</sup> 英訳本は「以是」に作る。

<sup>76</sup> 『孟子』梁惠王下。

<sup>77</sup> 『論語』顔淵。

<sup>78</sup> 「中庸」二十章。

<sup>79</sup> 原語は *regimen*。以下「目的語」と訳す。

<sup>80</sup> 『孟子』梁惠王上。

のようになるかどうか/こんな結果になるかどうか、私は知らない”。[「有諸」は]「有之」yeoù tchī “このようになる” “これは真実である” と等しいものである。6. 「彼」pì は例えば「彼時」pì chē または「微時」ouēi chē “その時にあって”。7. 「此」ts‘èè は例えば「以此」y ts‘èè “これによって”<sup>81</sup>。「如知此」<sup>82</sup>jù tchi ts‘èè “もし彼がこのことを知っているならば”。「之」tchi または「其」k‘í が加わる。例えば「此之謂也」<sup>83</sup>ts‘èè tchī ouēi yè “たしかに、これがこの箇所の意味である”。「此其所以至之鮮矣」<sup>84</sup>ts‘èè k‘í sò y tchī tchi sièn y “そしてこのために、今までここへ達する者がかくも少なかったのだ”。8. 「夫」foū は例えば「夫學者」<sup>85</sup>foū hiò tchè “文字によって学問する、かの人々”。「夫」foū はよく話を始める[時に使われる]。9. 「厥」kuě は Chu-king<書經>に頻繁に見える。「常厥徳.保厥位.厥徳匪常.九有以亡」<sup>86</sup>tch‘âng kuě tẽ, pàò kuě ouéi, kuě te fēi tch‘âng, kieòu yeoù y vâng “徳において継続的であり、自らの座を守る者よ、もし徳が続かなければ、汝は全世界を失うだろう”<sup>87</sup>。10. 「茲」tsēe は例えば「文不在茲」<sup>88</sup>vên pou tsái tsēe “ここまで真の教えが来ていないのではないか?”そして Chu-king<書經>においては「念茲在茲」<sup>89</sup>nién tsēe tsái tsēe “彼はここにいるこの人のことを考えている” [という例もある]。11. 「其」k‘í。例えば「其餘」k‘í yú “残りの”は、名詞の後ろに置くことが好まれる。「舜其大知也與」<sup>90</sup>chún k‘í tá tchī yé yú “Chun<舜>、彼は何と賢かったのだろうか!” “天其運乎.地其處乎”<sup>91</sup>t‘iēn k‘í yún hoū, tí k‘í t‘chú hoū “天は動かされないのではないか? 地は停まっていないのではないか?” [上のように]Tchoüang-tsee<莊子>は尋ねる。「人心其神矣乎」<sup>92</sup>gín sîn k‘í chîn y hoū “人の魂、それは精霊であるのか?” この言い方は極めて普通だ。初めの[語「人心」]は絶対格名詞のように見える。読者がまずそこに留まるように「人心」「人の魂」[が置かれ]、次いで更に後ろの「其」k‘í “その精霊”へ移り、動詞 est が[繫詞として意味上「其」と「神」の間に]補われるのだ<sup>93</sup>。「父母其

<sup>81</sup> 英訳本では「この点で」という訳も加わる。

<sup>82</sup> 『孟子』梁惠王上。

<sup>83</sup> 『孟子』滕文公上など。

<sup>84</sup> 欧陽修「答吳充秀才書」。

<sup>85</sup> 「夫學者」は多くの用例があるが、引用元として本書に頻出する欧陽修から「答吳充秀才書」を出典としておく。

<sup>86</sup> 『書經』咸有一徳。

<sup>87</sup> 英訳本では「汝は」ではなく「彼は」と訳す。

<sup>88</sup> 『論語』子罕。

<sup>89</sup> 『書經』大禹謨。

<sup>90</sup> 「中庸」六章。

<sup>91</sup> 『莊子』天運。

<sup>92</sup> 『揚子法言』問神。

<sup>93</sup> 英訳本ではこの箇所を直前の文と合わせて「「人心」は、文の残りが完成する前に読者の注意をしばらく向かわせるような一種の絶対格名詞であるように見える」と訳す。なお、est はラテン語のコピュラ動詞 sum (～である) の直説法・三人称・単数・現在形・能動相。

順矣乎」<sup>94</sup>foū mòu k'î chún y hoū “彼らは何と満足し喜んでいることか!” も同様。

代名詞「己」kì は我々の“自身 (sui, sibi, se)”に対応する。例えば「人之有技若己」<sup>95</sup>有之」<sup>96</sup>gîn tchi yeòu kí jò k'î yeòu tchī “近隣の人々の良いことについては、自らのそれであるかのように喜ばねばならない”。「同於己而欲之・異於己而不欲」<sup>97</sup>t'ông yū k'î êll yò tchi, y yū k'î êll pòu yò “我々は自分に適うものを愛し、相反するものを欲しない”。「克己」<sup>98</sup>kě (sic) k'î “自身に打ち勝つ”。「失己従人」<sup>99</sup>chě k'î ts'ông gîn “他人の意見を自分自身のそれよりも優先する”。「身」chīn、「躬」kōng、「親」t'sīn の諸字も再帰代名詞であることを示す。例えば「修身」<sup>100</sup>sieōu chīn “自身の完成に専念する”。「天子躬耕」<sup>101</sup>t'iên tseè kōng keng “皇帝が自らの手により自分で地を耕す”。「親筆筆之」t'sīn p'ī p'ī tchi “彼は自身の手で、自分の筆でこれを書いた”。「親口」t'sīn ke'òu “自らの口で”。私がそのことを私自身について言っているのか、あなたについて言っているのか、全く別の第三者についてなのかは、全く重要なことではないのである。

### 第三節

同一の字を名詞として、[あるいは]動詞として理解できるということは、初学者にすら有名なことである<sup>102</sup>。しかし、そのこと[について]は若干の例によって描写することが有益であろう。「天下之王」<sup>103</sup>t'iên hià tchi vâng “全世界の王”。「王天下」<sup>104</sup>vâng[sic] t'iên hià “全世界を治める”。「天帝」<sup>105</sup>t'iên tí “天の主人”。「帝天」<sup>106</sup>tí t'iên “天を支配する”。ある人が Mong-tsee<孟子> に尋ねた、<sup>107</sup>「天下悪<sup>108</sup>乎定」t'iên hià oū hoū tíng “どのようにして統治を強固にすることができるのでしょうか”と。Mong-tsee<孟子> は立っていたが、答えた。“[天下が]分かれなく

<sup>94</sup> 「中庸」十五章。

<sup>95</sup> 英訳本は「巳」に作る。

<sup>96</sup> 『書経』泰誓。

<sup>97</sup> 『莊子』在宥。

<sup>98</sup> 『論語』顔淵。

<sup>99</sup> 『書経』大禹謨に「舍己従人」の形で見える。

<sup>100</sup> 『孟子』尽心上。

<sup>101</sup> 『礼記』月令に「天子親載耒耜、措之參保介之御間、帥三公、九卿、諸侯、大夫、躬耕帝藉」とある。

<sup>102</sup> 英訳本では「よく知られている」と訳す。

<sup>103</sup> 『荀子』君道など。

<sup>104</sup> 『莊子』天道など。

<sup>105</sup> 『荀子』政論など。

<sup>106</sup> 『易経』震下の疏に見える。

<sup>107</sup> 以下のやりとりは『孟子』梁惠王上。「ある人」とは梁の襄王。

<sup>108</sup> 英訳本では右上に圈点がある。

なった時でしょう”、「定於一」 tíng yū y と。再び[襄王は] “誰がそれを一つにできるのでしょうか” あるいは“分裂しないようにできるのでしょうか”、「孰能一之」 chōu nēng y tchī と訊いた。Mong-tsee<孟子>は答えた、“それはむろん流血を好まない人でしょう”「不嗜殺人者能一之」 pōu chī chā gīn tchè nēng y tchi と。同一の文字「一」 y は動詞“一つにする”として、また数形容詞“一つの”として[使われているのが] あなたに分かるように選ばれている。今日の学者たちは、名詞が動詞になるたび<sup>109</sup>に字が声調を変えると主張する。[しかし]Tching-tsee tong<正字通>という辞書の作者はこれを否定し、そのような声調[変化]はかつて存在しなかったと主張している。<sup>110</sup>そうであれば、声調からは独立して、単に発話の内容から動詞[がどの字なのか]を知ることができる。例えば「孰能一之」 chōu nēng y tchī という四文字においては「一」 y という字が動詞として選ばれるのでなければ、[この四文字は]何の意味も持ち得ない。というのは、「孰」 chōu “誰が?” は動詞「能」 nēng “できる” の主格であり、“何ができるだろう” “何ができただろう” [という意味だからだ]。「之」は「天下」 t’iēn hià あるいは話題となっている地域の代わりとなる関係詞<sup>111</sup>である。「一」 y が残るが、これは「之」 tchi を支配する動詞として解されない限り全く意味を成さず、[従って]「一」という文字がここでは動詞であることは極めて明らかなのである。Han-yu<韓愈><sup>ボンジウス</sup>は 坊主 たちについて「人其人」<sup>112</sup> gīn k’i gīn “人間であるようにする”、“彼らを人間らしくする”のは当然であると述べる。Tao-te-king<道德経>ではこのように言う、「道可道」 táo k’ò táo “語ることのできる道理”<sup>113</sup>、「名可名」<sup>114</sup> míng k’ò míng “名付けることのできる名”と。[韓愈における] 一つ目の「人」という字は動詞であり、二つ目は名詞である。ヨーロッパ人にとって全ての名詞を動詞化することは易しい。しかし、我々の[使う動詞化の]多くが中国人の耳には生硬、つまり「生」 seng “新しい”、“生の”、“未熟な”なものとなってしまわぬよう、それ[=名詞の動詞化]についてはあえて大した調査をしていない<sup>115</sup>。

本来の意味でほとんど名詞として使われる可能性のない、あるいは文法家たちの文体におい

<sup>109</sup> 英訳本では「その逆でも」という一節が加わる。

<sup>110</sup> 古屋 (2009:248-49) によれば、例えば「飯」について上声が動詞「食べさせる」、去声が名詞「飯」という説に対し、『正字通』の編者張自烈は「飲人以酒曰酒之，猶食人以飯曰飯之，不必二音相別也」と主張する。つまり「酒」が名詞として使う時も動詞として使う時も声調は変わらないのと同様、「飯」についても声調を変える必要はないとの立場である。ただし、張自烈はプレマールが述べるように声調変化が「存在しなかった」と主張しているわけではない。詳しくは古屋昭弘『張自烈『正字通』字音研究』(2009:248-53) 参照。

<sup>111</sup> 英訳本は pronoun (代名詞) と訳す。

<sup>112</sup> 韓愈「原道」。

<sup>113</sup> 英訳本は「説得力ある教え」と訳す。

<sup>114</sup> 『老子』一章。

<sup>115</sup> 英訳本では「しかし我々は、中国人の耳に荒っぽくみつももないように聞こえる語を使うことがないよう、中国語に対してこの方法で進みすぎることに注意すべきである」と訳す。

ては[名詞として]ほとんど話されることのないような一群の動詞がある。それらは「死ぬ」べきであるが、「生きて」いる字「活字」hǒ tsée から「死んだ」字すなわち「死字」ssè tsée となることが不可能なため、そうした形で「生きて」いるのである。本来的に無情で、その生命が最低限の意味でも伝えられていないようなものは、私が誤っていなければ、見いだすことができない<sup>116</sup>。例えば、「天地」t'ien tí の二字は文字通りにとって、俗に“天と地”を指す。もしあなたが「天天」t'ien t'ien と言えば、“天を天とする”つまり“天の道理によって天を立てる”である。そして「地地」tí tí は同様に“地を地であるようにする”である。[しかし]口語の話し方では「天天」t'ien t'ien は「日日」gě gě と同じであり“毎日の”である。「地地」は話し言葉の用法ではなく、「處處」t'chú t'chú “どこでも”が正しいと私は考える。しかしこうした注記からあなたは中国語が曖昧さに欠けてはならないものの、むしろ多く[の曖昧さ]をもっているというよりも、[我々には]未経験であるだけで、ということをおぼえよう。動詞の目的語について注記せねばならない<sup>117</sup>。1.動詞の前に優雅に置かれる。例えば「不吾知也」<sup>118</sup>poũ ngoũ tchī yè “誰も私を知らない”と孔子は言った。もし「吾不知也」ngoũ poũ tchī yè と言えば、意味は“私は知らない”である。2.多くの動詞は目的語に「於」yū か「乎」hoũ を加えるよう要求する。「明乎善」<sup>119</sup>míng hoũ chén “善が何であるかを知ること”は「明善」míng chén よりも良い。「人間於我」<sup>120</sup>gín vén yū ngo “ある人が私に尋ねた”。以下の「小詞「於」「乎」について」の箇所でも多くの例を見よ。次章はずっと大きな重要性を持っている。

## 第二章 中国語の談話の小詞について

談話の小詞を若干の種類あるいは範疇に余すところなく分かつ文法規則を伝える人たちのことを、私は忘れてはいない。例えば、[彼らは語を]繫詞・区別詞・附加詞・通減詞などに[分類する]。[しかし]もし私がここでこのような分類に従って中国語を分析すれば、本書の価値を無にしてしまうだろう。私は中国語を我々の諸言語[で行われている分類]に帰することのないように願うものである。つまり、逆に、宣教師たちが自身の考えを解き放つことを楽しみ、おのおのの固有の言語の抽象的で丸裸の概念に、中国語という衣を与えるようになることほど、私が

<sup>116</sup> ここでは中国語の伝統的な品詞分類である虚詞・実詞の論に基づいて名詞-動詞の変換について論じる。本書の序論にもあるとおり、プレマールにおいて「活字」は動詞を、「死字」は名詞を含む概念である。動詞には名詞になりえないものがたしかに存在するが、普段は「死んだ」品詞すなわち名詞として使われるような語も、本来的には「生きた」品詞すなわち動詞としての要素を持っているというのが、プレマールの説明である。

<sup>117</sup> 英訳本では以下の 1.2. といった箇条書きをせず、続けて訳す。

<sup>118</sup> 『論語』先進。

<sup>119</sup> 「中庸」二十章。

<sup>120</sup> 「有鄙夫問於我」の形であれば『論語』子罕に見える。

切望していることはないのである<sup>121</sup>。デスパウテルスとアルヴァルスには別れを告げ<sup>122</sup>、私は 18 の独立した諸節において中国語の小詞を一つずつ論じ、説明を試みる。

### 第一節 「之」 tchī について

第一に、口語において「的」 tī となるものは、書物においては小詞「之」である。つまり属格<sup>123</sup>の関係を表す。例えば「大學之道」<sup>124</sup> tá hiò tchī táo “大いなる知恵の道理” あるいは “大いなる教義をなす道理”。「孝」 hiáo つまり “子の親への愛” は「百行之原、衆善之宗、仁義之實」 pě hîng tchī yuên, tchóng chén tchī tsōng, gîn y tchī chě “まことに、すべての行為の源と根本、すべての善のうち極めて優れたもの、友愛と正義の果実と完成” である。このような多くのフレーズは、しかるべきところでより詳細に述べられるように、お互い連続して置かれるのが常である。もし属格である名詞の後に他の名詞<sup>125</sup>が二つ続くと、「之」 tchī は決して省略されない。例えば「天之明命」<sup>126</sup> t' iên tchī míng míng “天の明白なる命令”。もし二字<sup>127</sup>が属格ならば、「之」 tchī は普通表に出ない。例えば「不敢寧於上帝命」<sup>128</sup> pòu kàn nîng yū chāng[sic] tí míng “至高の主人の命令を、敢えて畏れないということはない”。「不敢替上帝命」<sup>129</sup> pòu kàn t' í chàng tí míng “主の命令をやりすぎすようなことは私は敢えてしない”。しかし、二つの実名詞が続くときは「之」は[現れないものの]それらの間に意味上補われる。例えば「天命」<sup>130</sup> t' iên míng “天の命令”。「天

<sup>121</sup> プレマールの言語観では、言語から離れた純粋な概念が存在を認めているようである。その上で宣教師の母語であるヨーロッパ諸言語からそれを解放し、中国語の語彙と統語によって新たにそれを捉え直すように求めている。

<sup>122</sup> デスパウテルスは Johannes Despauterius (c.1460-1520)、アルヴァルスは Manuel Alvares (1526-83) のこと。ともにイエズス会士でありラテン語に長じ、その著作はイエズス会の学校でラテン語教科書として長く用いられた。デスパウテリウスはフランドルの著名な人文主義者でありヤン・デ・スパウテル (Jan de Spauter) として知られる。ラテン語に関する数種の著作があるが最も著名なものに *Commentarii Grammatici* (1538) がある。一方アルヴァルスはポルトガル人であり、ポルトガル語風にマヌエル・アルヴァレス (Manuel Alvares) として知られる。アルヴァレスには、デスパウテリウスを超えることを意図したラテン語入門書として *De Instituone Grammatica libri tres* (『ラテン文典』全三冊、1572) がある。これはヨーロッパだけではなく世界中のイエズス会で出版され、日本でも 1594 年にいわゆる天草版ラテン文典として出版された。

<sup>123</sup> 英訳本では「または所有格の」という一節が加わる。

<sup>124</sup> 「大学」一章。以下において章の順序は章句本による。

<sup>125</sup> 英訳本は「他の名詞」を「二つの名詞あるいは一つの名詞と一つの形容詞」と訳す。

<sup>126</sup> 『書経』太甲。

<sup>127</sup> 英訳本は「二字」を「二つの名詞あるいは一つの名詞と一つの形容詞」と訳す。

<sup>128</sup> 『書経』君奭。

<sup>129</sup> 『書経』大誥。

<sup>130</sup> 『書経』盤庚上。

意」<sup>131</sup>t'ien y “天の意思と意図”。「天心」<sup>132</sup>t'ien sīn “天の心”、“天の魂”。「天道」<sup>133</sup>t'ien táo “天の道<sup>134</sup>”。「天典」<sup>135</sup>t'ien tièn “天の不變の諸法<sup>136</sup>”。「天討」<sup>137</sup>t'ien t'ào “天の譴責”。「天子」t'ien tseè “天の息子”。「國法」kouë fā “国家の諸法”。「水路」chouü lou “水を通る旅路”。もし「水路」chouü tchi lou と言えば、その時は“水の流れ”、“川の流れ”となる。またもし二字の名詞<sup>138</sup>が前か後ろにあれば、その時「之」tchī は置かれるか省かれるが、[その基準は]用例が示すとおりである。すなわち「萬物之主」ván ouë tchi tchù “あらゆるものの主”、「天地之主宰」<sup>139</sup>t'ien tí tchi tchù tsài “天と地の主にして支配者”、「中國之人」あるいは「中國人」tchōng kouë gīn “中国人<sup>140</sup>”、「老實之人」あるいは「老實人」lào chě gīn “正直な人” “良い人” “単純な人”<sup>141</sup>、「西土之人」<sup>142</sup>sī t'òu tchi gīn “西洋人”、「北方之強」<sup>143</sup>pe fāng tchi k'iang “北方の精兵”、「盛徳之君子」<sup>144</sup>tchíng (sic) tē tchi kiün tseè “大いなる徳のある人”。時には、「之」がどの[タイプの]名詞にもついても繰り返される。例えば「韓氏之文之道萬世所共尊」<sup>145</sup>hān chí tchi vén tchi táo, vān ché sò kōng (sic) tsun “韓愈の書き方、論じ方はすべての人によって永遠に賞賛される”。Ngeou-yang<歐陽>は上のように[言った]。「聖人之心與天下之人之心原一心也」<sup>146</sup>chíng gīn tchi sīn yú t'ien hià tchi gīn tchi sīn yuēn y sīn yè “聖人の心は元々世のその他の人々の心から異なっていなかった”。「天下之人心」ということもできるが、「天下之人之心」と言う方がずっと良く、また明確である。というのは、「人心」は人間に生来の欲望を指し、[意図した意味と]異なりうる<sup>147</sup>。またその時、文の意味は“すべての人間に生来の欲望は聖人の心と同じだ”となってしまうが、[それは]誤りだからである。従って、「心」「こころ」、「人之」gīn tchi “人の～”、「天下之」“全

131 『墨子』天志上。

132 『書経』咸有一徳。

133 『書経』湯誥など。

134 英訳本では「天への道」と訳す。

135 『周礼』春官宗伯疏。なお英訳本では「天曲」に作る。

136 英訳本では「天の命令」と訳す。

137 『書経』皋陶謨。

138 英訳本では「二字の名詞」を「二つの名詞あるいは一つの名詞と一つの形容詞」と訳す。

139 『易経』震下坤上疏。

140 英訳本では「中央の王国の人」と訳す。

141 英訳本では「完璧な人」と訳す。

142 『書経』牧誓。

143 「中庸」十章。

144 『孟子』萬章上に「盛徳之士」として見える。

145 欧陽修「記舊本韓文後」。

146 錢一本「像象管見」卷三上。

147 「人心」をここでプレマールが指摘するように用いるものとして『孟子』滕文公上の「我亦欲正人心，息邪□」がある。

世界の～”などという意味になるように、「人」の後ろに「之」を繰り返すことが必要なのだ。

「此先王之教之神也」ts'èè siēn vāng tchi kiaó tchi chīn yè “そしてこれは古の王の教え方の神髄であった”。中国語を知っている者はみな、「教」と「神」の間にあるこの「之」は修辞と意味[の明瞭さ]に欠けてしまうために省略することができない、ということに気づく。

第二に、「之」はしばしば動詞の目的語となり、「其」k'i “それ”の代わりとなる。その時あなたは「之」が分詞ではないと言うかもしれない。「その疑問への」答：私は知っている。しかし大切なことは何か？私には、「之」の字の他のあらゆる方法を一括して一度に説明することは許されないのではないか。「だから各種の用例から学べ」。<sup>148</sup>「學之之博未如知之之要。知之之要未如行之之實」<sup>149</sup>hiō tchi chi pō, ouéi jū tchi tchi tchi yaó, tchi tchi tchi yaó ouéi jū hīng tchi tchi chē “何が徳において優れたことなのかを知ることは、それを得ようとして更に学ぶことよりも良く、その優れたものを実行することは、それを簡単に知ることよりもはるかに良い<sup>150</sup>”。その二つの[連続する]「之」において、初めのは動詞の[対]格[名詞]であり、第二のものは属格の印である。Tchu-hi<朱熹>がくどくどと述べているのと同じことを、Lun-yu<論語>はずっと短く優雅に述べている。「知之不如樂之。樂之不如行之」<sup>151</sup>tchī tchi pōū jū lō tchi, lō tchi pōū jū hīng tchi “善を知ることよりも善を楽しむ方が良く、善に没頭することはそれに不毛の愛を捧げるよりも良い”。「心誠救之」<sup>152</sup>sīn t'chīng ki'eōu (sic) tchī “心から誠実にそれを救済する<sup>153</sup>”。「一心求之」y sīn ki'eōu tchī “全力でそれを切望する<sup>154</sup>”。

第三に、同じ文字「之」は時には動詞的に解釈され、“ある場所へ移動する”、“近づく”ことを意味する。そしてもしその時「之」が後続すれば、[それは]動詞「之」の目的語である。例えば「不能之之」pōū nēng tchi tchi “彼らがそこへ行くこと、移ることはできない<sup>155</sup>”。「不知之之路」pōū tchī tchi tchi tchi lou “私はそこへ至る道を知らない”。一つ目の「之」という字は動詞“出発する”<sup>156</sup>である。二つ目は動詞の目的語であり、「之之」は“その場所へ出発する”[の意である]。三つ目は属格の印であり、「路」lou “道”は動詞「知」「知る」の目的語である。

第四に、「之」は形容詞的名詞と同じくらいよく実名詞とも結びつくが、その時は属格の印と

<sup>148</sup> 英訳本では「そのとき、それ[=「之」]は分詞とは言うことができない。しかし、我々は[「之」の]現れる各種の用法を提示するというを無視してはならないのだ」という一文が加わる。

<sup>149</sup> 『朱子語類』卷第十三。

<sup>150</sup> 英訳本では「徳とは何かを知ることは、善の求めるところを知ることよりも良く、優れたことを行うことは単なる知識よりもはるかに良い」と訳す。

<sup>151</sup> 『論語』雍也。ただし現行のテキストでは「知之者不如好之者、好之者不如樂之者」である。

<sup>152</sup> 「大学」九章。ただし「大学」本文は「教」ではなく「求」。英訳本も「求」に作る。

<sup>153</sup> 英訳本では「彼を心から歓迎する」と訳す。

<sup>154</sup> 英訳本では「彼に心から嘆願する」と訳す。

<sup>155</sup> 英訳本では主語を「我々が」と訳す。

<sup>156</sup> 英訳本では「導く」という訳も加わる。



いうよりは、後置される冠詞であるように見える。すなわち「人之」gîn tchī “人は”、フランス語では“その人は”。「民之」min tchi “その人々は”、“人民は”。「天命之」<sup>157</sup>t'ien mîng (sic) tchi “天による命令”。「回之為人也」<sup>158</sup>Hoêi tchī ouêi gîn yè “孔子の弟子 Hoi<回>は、～な人であった”。「老子之小仁義」<sup>159</sup>lào tseè tchī siào gîn y “哲学者 Lao-tsee<老子>は仁愛と正義を軽んじている”。もし名詞が形容詞的あるいは小詞的であれば、「之」tchi は置かれうるが、「者」の方がよく置かれる。「古之」kòu tchī あるいは「古者」kòu tchè “昔の人々”。「老之」lào tchī あるいは「老者」lào tchè “老人たち”。「學者」hiö tchè “学問をする人たち”。他の名詞が続くときは「之」tchi を置くことができない。「老人」lào gîn “老人”。「古帝」kòu tí “古代の王”。「形天」hîng t'ien “目に見える天”。「神天」<sup>160</sup>chîn t'ien “靈的な天”。「詩人」chī gîn “詩人”。「文人」vên gîn “礼儀正しく都会的な人<sup>161</sup>”。「罪人」tsoúi gîn “罪人”。

第五に、「之」と「者」は同時に優雅に置かれるが、それもさまざまな形を取る。1. 「學者之於經也」<sup>162</sup>hiö tchè tchi yū kîng yè “学問をする人々が kîng<経>の諸本について論じる時には<sup>163</sup>”。この言い方について私は第四章でより詳しく説明しよう。2. Ngheou-yang<歐陽>[修]は言う。「是學易者之過也」chi hiö y tchè tchi kouö (sic) yè “ことに、これは Y-king<易経>を研究する人々の完全なる誤りである”。「此善為政者之術也」<sup>164</sup>ts'èè chén ouêi tching tchè tchi chü yè “これが正しく統治する人々の技術なのである”。「後之學者」heóu tchi hiö tchè “後の時代の教養ある人々<sup>165</sup>”。「故之為政者」<sup>166</sup>kou tchi ouêi tching tchè “共同体を統治していた昔の人々”。自らの謙讓について Ngheou-yang-sieou<歐陽修>は言う。「某士之賤者」<sup>167</sup>meò ssée tchi tsien tchè “文人たちの中にあって平凡な私”。[上述の]諸例の中で「之」tchi が属格を示すことはむろん私にも分かっている。しかし、私は[項目を]別に立てておく。というのは、[これらの諸例は]文体の定型句であるように思われるからだ。

第六に、「謂」ouéi という文字は以下のように「之」とよく結びつく。「此之謂潔矩之道」<sup>168</sup>ts'èè tchi ouéi kiè kiù tchi táo “ことに、これは隣人に対する仁愛の尺度であり規範と呼ばれるものであ

<sup>157</sup> 「中庸」一章に「天命之謂性」とある。

<sup>158</sup> 「中庸」八章。

<sup>159</sup> 韓愈「原道」。

<sup>160</sup> 『書経』多方。

<sup>161</sup> 英訳本では「学者、紳士」と訳す。

<sup>162</sup> 朱熹「答敬夫孟子説釋義」。

<sup>163</sup> 英訳本では「古典を学ぶ人々は」と訳す。

<sup>164</sup> 欧陽修「答西京王相公書」。

<sup>165</sup> 英訳本では「学者たち」と訳す。

<sup>166</sup> 柳宗元「時令論」。

<sup>167</sup> 欧陽修「答西京王相公書」。

<sup>168</sup> 「大学」十章。ただし「大学」本文は「絜矩」である。英訳本は「絜短」に作る。

る<sup>169</sup>。「此之謂自謙」<sup>170</sup>ts'èè tchi ouéi tseè k'iè (sic) “これは‘自分で満足すること’と呼ばれる”。Han-yu<韓愈>は[以下のように]言う、「由是而之焉之謂道」<sup>171</sup>yeôu ché êll tchi yēn tchi ouéi táo “そこへ行き進むことは‘道’と呼ばれる”と。初めの「之」tchi という文字は動詞であり、二つ目は小詞である。「焉」yēn は明晰さを増すために挿入された。第 10 節の小詞「焉」[の項目]を見よ。Ta-hio<大学>に「此謂知本」<sup>172</sup>ts'èè ouéi tchi pèn “これは根本を知ることと呼ばれる”とある。文体の[理解の]ために、以下の文を注記しておく。「主之者之謂帝妙之者之謂神」tchù tchi tchè tchi ouéi tí, miáo tchi tchè tchi ouéi chîn “すべてのものを治める人、これは神と呼ばれ、人々に美を加えるものを精霊と呼ぶ<sup>173</sup>”。「主」、「妙」という文字は動詞であるか、あるいは小詞「者」に従う分詞である。一つ目の「之」の字は動詞の[対]格[名詞]であり、二つ目は小詞である。「之」はすべてのものに付く。[以下の例文も]同じ意味で説明できる。「以主之言謂之帝。以妙之言謂之神」y tchù tchi yēn<以主之言> “この点で” ouéi tchi tí<言謂之帝> “彼は‘神’と呼ばれ<sup>174</sup>”、y miáo tchi yēn<以妙之言> “別にこの点で” ouéi tchi chîn<謂之神> “それは精霊と呼ばれる”。

第七に、以下の言い方をここで注記するべきである。「未之能行」<sup>175</sup>ouéi tchi nēng hīng “彼はもうこのことをしたくない<sup>176</sup>”。「未能行之」というよりも[之の位置を]変更する方がより優雅である。Mong-tsee<孟子>の「莫之禁」<sup>177</sup>mǒ tchi kín “何ものも彼を禁じたり制したりすることができない<sup>178</sup>”のように。「莫禁之」と言えば他の意味が生じる。一般的に生じることを先に置くことが普通である。例えば「行而不至者有之」hīng êll pǒu tchí tchè yeòu tchi “自ら行くが到着しない、これは確かによくあることだ”。次いで、アデュナトン<sup>179</sup>となることどもが加わる。「不行而至者未之有也」pǒu hīng êll tchí tchè ouéi tchi yeòu yè “しかし何ものもなしえないのに君の望むところへ達するということは、今まで決してなかったことである”。[この文については以下を]注記せよ。1. 「之有」は優雅さを伝えている。というのは、一つ目の例文においては「之有」とは

<sup>169</sup> 英訳本では「これが、彼らが徳行に無関心となる方法と呼ぶものである」と訳す。

<sup>170</sup> 「大学」六章。

<sup>171</sup> 韓愈「原道」。

<sup>172</sup> 「大学」四章。

<sup>173</sup> 英訳本では訳文中の「神 (dominus)」を「tí[帝]」、「精霊 (spiritus)」を「shin[神]」と訳す。

<sup>174</sup> 英訳本では訳文中の「神 (dominus)」を「tí[帝]」、「精霊 (spiritus)」を「shin[神]」と訳す。

<sup>175</sup> 『論語』公冶長。

<sup>176</sup> 英訳本では「することができない」と訳す。

<sup>177</sup> 『孟子』尽心上。

<sup>178</sup> 英訳本では主語を「彼は」とする。

<sup>179</sup> ラテン語の伝統的な修辭法の一。誇張法のこと。つまり先の例文では一般的に起こりうることを述べてから、それがよくあることだという文型であるのに対し、ここでは一般的に起こりえないことを述べてから、それが生じたことのないことであると述べる文型であると言いたいのである。

言うことができず、「有之」と言うべきであり、まさにこの形で生じる<sup>180</sup>。そして二つ目の例文において「之」は「未」とともに示され、「決してないだろう」となった。「未之」はもし動詞「有」の目的語であればより優雅であろう。「故諺有之曰」<sup>181</sup> *kou yén yeoù tchi yuě* “古代の諺は～のように言う”。[「有之」に対して]「無之」 *voū tchi* “このようであることはない”、“このようになることはない”。

## 第二節 「者」 *tchè* について

第一に、動詞と結合して小詞であることを示す。例えば「生者」 *sēng tchè* “生きている人々”、「死者」 *sseè tchè* “死者たち”。現在では老人ゆえに教師である人々<sup>182</sup>は「先生」 *siēn sēng* “先に生まれた人々”と呼ばれる。若者たちは「後生」 *heóu sēng* “後に生まれた人々”と言われる。孔子のように、「先死者」<sup>183</sup> “先に死ぬ我々”、「後死者」<sup>184</sup> “後に死ぬあなたがた”と死への畏れなく言うのが常である。「無情者」 *voū ts'ing tchè* “生まれの悪く、何の情愛も持たない人々”。動詞「有」 *yeoù* “持つ”が[「無」と「情」の間に]補われる。「愛人者人恒愛之。敬人者恒敬之」<sup>185</sup> *ngái gín tchè gín hêng ngái tchī, kóng gín tchè gín hêng kóng tchī* “他の人々を愛する人は他人からも常に愛され、敬意を[他人に]示す人は逆に[他人から]敬われる”。Mong-tsee<孟子>[は上の]ように[言った]。[「者」は]名詞<sup>186</sup>とも結びつく。例えば「聖者」 *ching tchè* “聖人たち”。「愚者」 *yū tchè* “愚かで非道な人々”。「性者」 *sing tchè* “本性”。「仁者樂山。知者樂水」<sup>187</sup> *gín tchè lö chān, tchī tchè lö chòu* “最善なる男たちは山を好み、学識ある男たちは水を好む”。

第二に、我々の諸言語においては抽象名詞と呼ばれる名詞が非常に多くある。例えば *bonitas* “善”、*fortitudo* “強さ”などである。そしてそのような長所を持つ人は *bonus* “善人”、*fortis* “勇敢な人”と呼ばれる。しかし中国語において我々は[そうした派生を]あまりやりすぎぬよう用心すべきである。その使い方については、新しい用法を[我々が]作り出そうとするよりも、[中国の]優れた文筆家たちによって繰り返し使われている習慣による方がずっと安全である。Tchong-yong<中庸>なる書は「誠者」 *tch'ing tchè* と「誠之者」 *tch'ing tchī tchè* の間に違いをつけ

<sup>180</sup> 以下、英訳本では箇条書きを採用せず内容をまとめて訳している。なお、原文の箇条書きに2以降はない。

<sup>181</sup> 「大学」八章。

<sup>182</sup> 英訳本では「老人ゆえに教師である人々」を「紳士たち」と訳す。

<sup>183</sup> 『礼記』坊記。

<sup>184</sup> 『論語』子罕。

<sup>185</sup> 『孟子』離婁。

<sup>186</sup> 英訳本では「あるいは形容詞」という一節が加わる。

<sup>187</sup> 『論語』雍也。ただしフレーズの順番が逆。「知者樂水、仁者樂山」

て、「誠者自誠」<sup>188</sup>tch'îng tchè ts'éé (sic) tch'îng “誠実さは自らの誠実さから[来る]のである” とする。「道自道」<sup>189</sup>táo tsée táo “道理は自らによって道理なのである” のように。次いで、「誠者」tch'îng tchè は“自身の最高の完成と誠実さ<sup>190</sup>”であり、「誠之者」tch'îng tchī tchè は自らの努力により完成という成果を有している人のことをいうのであって、一語の「誠者」は抽象名詞に属し、「誠之者」は具体名詞に属するように私には思われる。

第三に、「者」は自らと呼応する、あるいは自らと結びつく小詞としてよく「也」yè を要求するが、ここで注記すべき用法が3つ生じる

第一の用法は、他の字[の意味]を説明するたびに[現れるものである]。例えば「徳者本也」<sup>191</sup>tè tchè pèn yè “徳とは原理となるものであり、あたかも根のようなものだ”。「山者泉之原也」chān tchè ts'uên tchī yuên yè “山々は泉の源である”。「仁者人也」<sup>192</sup>gîn tchè gîn yè “仁愛とは人間そのものである”。もし[その]意味が Tchung-yong<中庸>の“仁愛とは人間の本性である”あるいは“人間自身の本性から仁愛と徳へと志向するものである”ならば、それは全くもって正しいだろう。一方、もしそうであるならば、この場所の力がほのめかすように、意味は“人間は仁愛そのものである”だが、それは人間そのものによってであるといえ、全く正しいとは言えない。神のごとき人間であれば、全く正しいのであろうが。「政者正也」<sup>193</sup>tchíng tchè tchíng yè 「教者孝也」<sup>194</sup>kiáo tchè hiáo yè。“政”‘統治する<sup>195</sup>’という字は「正」‘正しさ’と同じであり、「教」‘法<sup>196</sup>’という字は「孝」‘息子としての服従と愛’と同じである”。私は、ここで注記することを無益とは思わない[ので注記する]。「政」と「正」という二字の間[の関係]は全く異なる「教」と「孝」[の間の関係]のようなものである。あなた自身の目に明らかな通り、[漢字の]側の字「攴」[の有無]から[関連性]が来るのだ。さらに Choüe ven<説文>によれば、「攴」は“追い立てる”“貫く”を意味する<sup>197</sup>。そのため「敏」min “追い立てる”“成熟する<sup>198</sup>”は「毎」“しばしば”と「攴」“貫く”[との組み合わせ]以上のものではない。もしあなたが常に他人に促していれば、それはついには人を急がせることとなるだろう。つまり“(独楽を回す鞭の)一振り一振りが(独

<sup>188</sup> 「中庸」二十五章。ただし「中庸」の原文は「誠者自成」である。英訳本もラテン語版と同様「誠」に作る。

<sup>189</sup> 「中庸」二十五章。

<sup>190</sup> 英訳本では「真実それ自身」と訳す。

<sup>191</sup> 「大学」十章。

<sup>192</sup> 「中庸」二十章。

<sup>193</sup> 『論語』先進。

<sup>194</sup> 「教者効也」であれば『白虎通』にある。

<sup>195</sup> 英訳本では「統治」という名詞に訳す。

<sup>196</sup> 英訳本では「命令」という訳も加わる。

<sup>197</sup> 『説文』は「敏」を「疾也。从支民聲」と解説し、「速い」という意味とする。

<sup>198</sup> 英訳本では代わりに「せきたてる」という訳も加わる。

樂を) 勢いづかせる” (Dant animos plagae) <sup>199</sup>というわけだ。「教」 kiao と「政」 tching からそれ [=「父」] を奪うと、「孝」 hiao “息子としての愛” と「正」 tching “正しさ” しか残らず、「政」 tching “支配” または「教」 kiao “教え” には[字の構成要素として]十分ではない <sup>200</sup>。ゆえに制定された法というものは正義に[対する]ものではないと言える。なぜなら、正しいものは矯正されないし、自発的に愛しているものを[無理矢理に]愛させることもないからだ。とはいえ、これらについては述べたままである。

第二の用法は、談話を成すところのある字が、よりよい表現となるように言い換えられる[たんに現れる]が、その時は当該の字の後ろに「也者」が置かれる。Tchong-yong<中庸>におけるように、天性の光あるいは「道」 tao と言われる正しい道について語る時、後述の[例文の]のように言い換えられる。「道也者不可須臾離。可離非道也」<sup>201</sup> tao yè tchè pòu k'ò sū yú lí, k'ò lí fēi tao yè “言うところの、かの正しき道は一瞬たりとも放棄することはできない。もし自由に離れることができるならば、それは正しい道ではないだろう”。[また]同書から、「中也者天下之大本也」<sup>202</sup> tchōng yè tchè t'ien hiá tchī tá pèn yè “‘中間’ と呼ばれるものはあたかも天下の大きな根本のようである”。最初に「夫」を加えることもできる。例えば「夫政也者蒲蘆也」<sup>203</sup> “我々が述べるところの、かの高名なる統治は、水辺に生える <sup>204</sup>あの大きなアシのようだ”。

第三の用法。文末に「者也」 tchè yè が置かれるが、「者」は[「也」に]先行することもあれば、しないこともある。すなわち「夫孝者善繼人之志。善述人之事者也」<sup>205</sup> fōu hiao tchè chén kí gín tchī tchī, chén chū gín tchī ssée tchè yè “息子としての愛 <sup>206</sup>は、父の企てを継続し、はっきりとそれを後代に与えることにある”。「未有學養子而后嫁者也」<sup>207</sup> ouéi yeòu hiō yàng tsèe êll heóu kia tchè yè

<sup>199</sup> ヴェルギリウス『アエネーイス』7巻383行。この箇所は狂気に陥った女が踊り狂う様子を子供たちが回す独楽になぞらえて描写している。この文において plaga (英語 blow) の派生形 plagae を複数形主格と解して「(独楽を回す鞭の)一振り一振りが(独楽を)勢いづかせる」という解釈の他に、plagae を単数与格とみなして「(子供たちは)魂を一振り一振りに込める」という解釈も成り立つ。ここでは、「教」「政」という字には、「父」があることによって“「孝」「正」であることを促す”という意味がある、という文脈に従って前者を採る。なお現時点で最新の日本語訳では「革紐の鞭はいよいよ柘植の独楽を勢いづかせる」(207頁)と前者に解する。杉本正俊訳『アエネーイス』(新評論、2013)。なお英訳本は dant animos plagae とのみ記し、その訳を載せない。

<sup>200</sup> つまりプレマールの解説によれば、「教」は「孝」と「孝」を促す「父」から成り、「政」は「正」と「正」を促す「父」から成るということである。

<sup>201</sup> 「中庸」一章。ただし「中庸」の本文は「不可須臾離也」とする。

<sup>202</sup> 「中庸」一章。

<sup>203</sup> 「中庸」二十章。また、ここにローマ字標音はない。

<sup>204</sup> 英訳本では「水辺に生える」を「揚子江の」と訳す。

<sup>205</sup> 「中庸」十九章。

<sup>206</sup> 英訳本では「息子としての愛」を「義務の内実」と訳す。

<sup>207</sup> 「大学」九章。

“後々結婚するために子の養育法を学ぶような若い女は決していないだろう”。Tá-hiö<大学>における「后」という字は「後」heou “のち”を表すために選ばれたのである。「如此者哉<sup>208</sup>及其身者也<sup>209</sup>」<sup>209</sup>jû ts'ée tchè tsāi kī kī (sic) chīn tchè yè “そのようにふるまう者は、疑いなく不幸を被るだろう”。「者邪」tchè yê は Ngheou-yang<歐陽[修]>によって「者也」の代わりであることがわかるが<sup>210</sup>、同じ著者および他の素晴らしい文章の作者たちには「是也」もある。例えば「故之人有行之者。武王是也」<sup>211</sup>koú tchī gīn yeòu hīng tchī tchè, voù vāng ché yè “古代の人々の中でそのようにした人がいないわけではなく、Vou-vang<武王>がそのようであった”。これや似たような諸例において、「是也」の代わりに「者也」というのはよろしくない。

第四に、時々文末のこの「也」が省略される。例えば「貨悖而入者亦悖而出」<sup>212</sup>hó póei êll gě tchè y póei êll t'chū “悪く手に入れたものは、悪く消え去る”。もし「者也」を置けば他の意味が生じうるだろうが、[ここでは話者が]意図することを証明するためにこの古い警句を利用しているのだ。そして今やこの諺はそれが意図するような意味になっているのである<sup>213</sup>。「民日遷善而不知為之者」<sup>214</sup> “人々は日々良くなっていくが、徳においてどうやってこのように進歩したのか、誰がそうした変化をもたらしたのか、彼は知らない”。

Han-yu<韓愈>の「老子之所言道德云者去仁與義言之也」<sup>215</sup>laò tseè tchi sò yèn táo tẽ yún tchè, k'íu gīn yú y yèn tchi yè “Lao-tsee<老子>は道と徳について述べたが、彼の言うことは方法において仁愛と正義を取り去って言っているのと同じだ”。注記 1.「所言」には対応する「云者」がある。2.「老子」Lao-tsee の後ろ[の「之」]は分詞だが、「言」の後ろ[の「之」]は[動詞の]目的語であり、「道德」を指す。3.「言之」は「所言」に対応する。4.「也」は習慣上普通は「者」にかかるとある。5.最後に、「所言 sò yèn～云者 yún tchè」は同様の散文における他の書物にも見える言い方である。

### 第三節 分詞「也」について

この分詞についてはすでに若干のことを述べたが、なおも言うべきことが多くある。

<sup>208</sup> 「中庸」本文では「裁」である。英訳本では「災」に作る。

<sup>209</sup> 「中庸」二十八章。

<sup>210</sup> 例えば「與張秀才第二書」の「豈如誕者之言者邪」。

<sup>211</sup> 『孟子』梁惠王下。ただし「故之」は『孟子』本文では「古之」である。

<sup>212</sup> 「大学」十章。

<sup>213</sup> 英訳本では「「者也」は異なる意味になるだろう。彼は疑いなく、彼の主張したいことの証拠としてこの古い警句に言及しているのである。しかし、この諺は他の諺と同様の言い方で表されている」と訳す。

<sup>214</sup> 『孟子』尽心上。なおここにローマ字標音はない。

<sup>215</sup> 韓愈「原道」。

第一に、常に「者」が先行する必要があるというわけではない。例えば「成己仁也」<sup>216</sup>t'ch'ing k'ì g'ín yè “彼は自ら仁愛を完成している”。「見不善而不能退。退而不能遠過也」<sup>217</sup>kién p'ou ch'én èll p'ou n'eng t'ouí, t'ouí èll p'ou n'eng yuèn, kouó yè “悪を見てそれらを除かなかつたり自ら遠いところに追い出したりしないのは、平穩を遠ざけることである<sup>218</sup>”。「不能」“彼らはできない”は常に文字通り[の意味]にとらなくともよい。“彼らは除くことができない”は「不能退」だが、これは“思い切って取り除かない”“彼が望まないので追い出さない”ということである<sup>219</sup>。「遠」yuèn “遠く”あるいは動詞“遠くする<sup>220</sup>”は「退」“追い払う”の言い換えである。Tchouang-tsee < 莊子 > は言う、「嗚呼遠哉其分於道也」<sup>221</sup>oū hoū yuèn tsāi k'í f'ēn yū táo yè これは、ラテン語で[考えてあえて中国語で表せば]「其分遠於道」<sup>222</sup> “それは道から大きく隔たっている”ということであるが、しかし中国語では[ラテン語よりも]何と美しく力強いことであろうか！[その理由は]1. 「嗚呼」「ああ」と叫ぶ。2. 自らの感情が「哉」で表される。つまり「遠哉」「ああ、何と遠いのか！」[のように]。3. ちょうど最後に「也」の字[がある]。例えば「大哉言也」<sup>223</sup>tá tsāi y'ēn yè “この言葉は偉大である”のように。[こうした]言い方は非常によくある<sup>224</sup>。

第二に、ただの文末詞であるように見える。例えば「聽訟吾猶人也」<sup>225</sup>t'ing s'óng ngóu yeóu (sic) g'ín yè “訴訟を聞く時、私は他人であるかのようだ<sup>226</sup>”。これは“訴訟が他人のものである限り、私は安全でいることができる”ということだ。「故君子慎其獨也」<sup>227</sup> “それゆえ知恵ある人は自らの孤独に自覚的で確かであるよう用心する”。

第三に、時々、[文中の]最初の節の終わりに「也」が置かれなければならない。例えば「道之不行也吾知之矣」<sup>228</sup>táo t'ch'í p'ou h'ing yè, ngóu t'ch'í y “真の教えはつまづくが、私はなぜその

<sup>216</sup> 「中庸」二十五章。なお英訳本は「已」に作る。

<sup>217</sup> 「大学」十章。

<sup>218</sup> 英訳本では「悪を冷淡に見ることや、それをわずかな非難と共に退けるのは、それ自体が誤りである」と訳す。

<sup>219</sup> 英訳本ではこの一文の代わりに「“彼は退けることができない”とはすなわち“退けないだろう”ということである」という訳が加わる。

<sup>220</sup> 英訳本では「取り除く」と訳す。

<sup>221</sup> 『莊子』漁父。

<sup>222</sup> 英訳本ではここに「“ああ！”と彼は叫び」という一節が加わる。

<sup>223</sup> 『孟子』梁惠王下。ただし『孟子』本文では「大哉言矣」である。

<sup>224</sup> 英訳本ではこの部分を「読者は中国語ではよくあるこの種の表現方法における特徴的な語に気づくであろう」という一文でまとめる。

<sup>225</sup> 『論語』顔淵。また「大学」四章。

<sup>226</sup> 英訳本は「訴えを裁くには、私は誰とも同じくらい適任である」と訳す。

<sup>227</sup> 「大学」六章。ただし「大学」本文は「故君子必慎其獨也」と「必」字が入る。なお、ここにローマ字標音はない。

<sup>228</sup> 「中庸」四章。ただし「中庸」本文は「道之不行也我知之矣」と「吾」ではなく「我」である。

ようになるのかを知っている”。単なる句末の語として [後続の節が]yè<也>の後に非常によく置かれるが、[それは]調子と優美さのゆえである。例えば「天地之大也人猶有所憾」<sup>229</sup>‘iēn tí tchī tá gīn yeōū (sic) yeōū sò hán “天と地は無限に広いが、人々はそれ以上のものを熱望する”<sup>230</sup>。「昔者神農之有天下也其&c.」<sup>231</sup> “かつて Chinnong<神農>が天下の支配権を有していたが、彼は～”。Ngeou-yang-tsee<歐陽子>は言う、「夫禮之為物也聖人之所以飾人之情而閒其邪闢之具」<sup>232</sup> “儀礼または外見上の優雅さは、それによってあたかも人間の感情に装飾を加え、その過誤の不正を撃退する道具であるかのようだ”。この一文はもう少しはつきりと説明すべきである。注記 1. 最初の 6 字はほかでもなく「禮」「儀礼」という字にのみかかる。ヨーロッパ人は「禮者具也」「儀礼とは道具である」と言い、次いで「聖人用之以～」「聖人はそれらを～のために用いる」などと言うだろう。2. 我々には、優雅な中国人がその言葉をいかに配置するのかが分かる。つまり 1. 意味は最初の 6 字では未決のまま。2. 「具」「道具」という字を最後に置き、そうした道具で作られるものを先行させるのである。3. 「聖人」「聖人」は、「飾」と「閒」という二つの動詞の主語である。4. 「人之情」「情意」「感情」は動詞「飾」の目的語である。5. 「而」は繫辞の小詞である。6. 「其」は「情」「人々の感情」に対応する。7. 「邪闢」は動詞「閒」の目的語である。8. 「具」の前にある「之」は属格の印であり、最後の位置に置かれなければならない字「具」に支配され、それゆえに二文字すなわち「飾」「飾る」と「閒」「撃退する」を導く「所以」は[「具」を]修飾し制限されるのである。もしすべてのフレーズをこのような方法で文法的に解説しようとするれば終わりが無いだろう。それゆえ私がこのように少しずつ置く例文から、私が説明すべきものを残したままで[読者はその構造を]体得せねばならないだろう<sup>233</sup>。

第四に、小詞「也」は一般に固有名詞と結びつく。Lun-yu<論語>という書において、孔子はその弟子 Yeōū<[仲]由>、Kieōū (sic) <[冉]求>、Hoèi<[顔]回>について語ったり、彼らに話しかけたりして言う。「由也」yeōū yè、「求也」k’ieōū yè、「回也」hoèi yè<sup>234</sup>、「嗚呼封」<sup>235</sup>ōū hōū fōng、「來禹」<sup>236</sup>lāi yù。fōng<封>と yù<禹>は固有名詞である。あなたが「來禹也」と言えば滑稽であり、「禹也來」と言えば“Yù<禹>が来たらしいのに”あるいは“[禹は]来るだろう”という意味になりうる。しかし「來禹」と言う時、その意味は Yù<禹>に近づくよう命じることである。「封」

<sup>229</sup> 「中庸」十二章。

<sup>230</sup> 英訳本では「天と地は無限に広いが、人々の欲望を満たすことはできない」と訳す。

<sup>231</sup> 『莊子』讓王。なお「&c.」には「時祀盡數而不祈福也」が入る。ここにローマ字標音はない。

<sup>232</sup> 歐陽修「辨左氏」。ここにローマ字標音はない。

<sup>233</sup> 英訳本では「以上のような文の詳細な分析に深く注意することで、学習者はこうした分析の与えられていない文の解釈においても類推できるような一般的な方法を見つけるだろう」という一節が加わる。

<sup>234</sup> ここまでの 3 例は『論語』先進などに見える。

<sup>235</sup> 『尚書』康誥。

<sup>236</sup> 『尚書』大禹謨。



Fōng は、その叫び「嗚呼」ōu hoū によって十分に[「也」がないのを]補われている。あなたが「嗚呼封也」と言えば最悪だ。

第五に、「也」は返答の際に起こる。例えばあなたが「可乎」k'ò hoū? “私に許されているか?” と聞く。答え:「不可也」<sup>237</sup>poū k'ò yè “許されていない”。問い:「善乎」chèn hoū<sup>238</sup>、答え:「善矣而未盡也」<sup>239</sup>chén y èll ouéi tsín yè “たしかに善いが、最善ではない”。「盡」「消尽する」は[意味上]「善」chén が補われる。

第六に、私が[第一部]第四章で述べたように、たびたび繰り返される。その間、少数ではあるが以下について熟考せよ。「姓所同也名所獨也」<sup>240</sup>síng só t'ông yè, míng sò toū yè “家族に共通の名は多いが、各自の若い時の名は[各人に]固有のものだ<sup>241</sup>”。「無異也一也」<sup>242</sup>voū y yè y yè “全く、またはわずかしか違いはない”。彼<sup>243</sup>は理由を説明し、次いで結論を下す。「則一也無異也」<sup>244</sup>tsé y yè voū y yè “それゆえ全く違いはない”と。Ngheou-yang-tsee<歐陽子>は上のように[言う]。「仁宅也義路也禮服也智燭也信符也」<sup>245</sup>gín tsé yè, y lou yè, lì foū yè, tchí tchō yè, sín foū yè “仁愛は我々の家であり、正義は我々の道であり、優雅さは我々の衣服であり、知恵は我々の松明であり、信用は我々の印である”。Yang-tsee<楊子>は上のように[言う]。5つのフレーズはすべて対になっていて、いずれも知性における非常に明白な理想を示す。Tchong-yong<中庸>なる書は言う、「天下可均也爵祿可辭也白刃可蹈也中庸不可能也」<sup>246</sup>t'iēn hiá k'ò kiūn yè, tsiō loū k'ò ts'è yè, pě gín k'ò táo yè, tchōng yōng (sic) poū k'ò nēng yè “[人々は]世界を平和にする<sup>247</sup>ことができ、地位は拒むことができ、むき出しの剣を踏みつけることができるが、中庸を保つことはできない”つまり“優れた中庸を維持することほど難しいことはない”と。

第七に、言葉が不快にならぬような他の文字を支えるためによく加えられる。例えば「父母之葬無貴賤一也」<sup>248</sup>foū moū tchī sāng voū kouéi tsíen y yè “両親の悲しみにおいては”すなわち“父と母の死後行われる悲しみについて述べる時”、これを中国語では「父母之葬」というが、談話

<sup>237</sup> 『韓非子』内儲説下・六微に「楚王謂干象曰「吾欲以楚扶甘茂而相之秦，可乎」干象對曰「不可也」」とある。

<sup>238</sup> ここに例文のラテン語訳はない。

<sup>239</sup> 欧陽修「経旨易或問」。

<sup>240</sup> 『孟子』尽心下。

<sup>241</sup> 英訳本では「sing は姓で ming は個々人の名である」と訳す。

<sup>242</sup> 欧陽修「周召分聖賢解」。

<sup>243</sup> 欧陽修のこと。

<sup>244</sup> 欧陽修「周召分聖賢解」。

<sup>245</sup> 『法言』修身。

<sup>246</sup> 「中庸」九章。ただし「中庸」本文によれば冒頭には「天下國家可均也」と「國家」が入る。

<sup>247</sup> 英訳本では「征服する」と訳す。

<sup>248</sup> 「中庸」十八章。

はまだ未決のままであり、奪格名詞のようなものとなる<sup>249</sup>。次の三文字は「葬」「悲しみ」ではなく、[文中には明示されないが]葬儀を行わねばならぬ息子を受ける。「貴族であろうと平民であろうと異なりなく」。次いで「一」という文字は「葬」を受け、豊かであれ貧乏であれ、等しくすべての人が同様に[悲しみに]支配されることを示す。「一」の字は単独で残ったままであるから、「也」yè が加えられるのだ。

第八に、文末の「也」の後ろにしばしば「與」yū が見いだされる。例えば「可見化民之道同出一揆也與」<sup>250</sup>k'ò kién hoá mīn tchī táo t'ông t'chū y kouě yè yū “それゆえ、人々を変える技術は一つの同じ道から成功するというのは明らかなのである”。Ngheou-yang-sicou<歐陽修>はそのように[言う]<sup>251</sup>。そして Lun-yu<論語>においては[こう言う]、「語之而不惰者其回也與」<sup>252</sup>yū tchī èll pou tó tchè, k'í hoèi yè yū “自らに与えられた教えを実際に怠慢なく行う人、それはまさに我が弟子「回」である”と。すなわち、意味としては、[顔]回は実行することにおいて遅滞ないだろう、ということだ。ヨーロッパ人は中国語でなくラテン語で[考えて]「語曰而回不惰」とか、少しも良くはないが「回也為人語之而不惰」などと言うだろうが、一般に冒頭ははるかに美しく「語之而不惰者」と言われる。この「之」は弟子 Hoi<回>には全く係らず、一般に人間誰でも[を指す]。次いでこれをその弟子に「其回也與」のように当てはめるのだ。「其」の字は先行するすべてのフレーズに係る。

第九に、Sing-li-ta-tsuen<性理大全>という書はしばしば「也有」yè yeou “これをも加える”がある。「也」はそこでは[「有」に]先行して置かれなければならない、「又」yeou (sic) や「亦」y と同じものであるが、[也を使うのは]俗で卑しい話し方である。なぜならこの書は[そうした文体で]語ることを望んでいるからである。

#### 第四節 分詞「於」yū あるいは「于」yū が全く同義であることについて

第一に、この小詞はラテン語の前置詞 in に対応する<sup>253</sup>。例は明白である<sup>254</sup>。「於此」yu ts'eè “ここで”、“この点で”。「止於至善」<sup>255</sup>tchì yū tchí chén “最高の善に安らぐ”。「止於丘隅」<sup>256</sup>tchì

<sup>249</sup> 「無貴賤」や「一」の動作主体が明示されておらず、「父母之葬」が話題を示すにすぎないことを言う。以降の本文から了解されるとおり、プレマールの解釈によれば、この文の主語は文中に明示されない、喪主としての息子である。

<sup>250</sup> 『日講書経解義』巻十。

<sup>251</sup> 前注に指摘したように、これは欧陽修を出典としてはいないようである。

<sup>252</sup> 『論語』子罕。

<sup>253</sup> 英訳本ではこの分の前に「これは明らかに「于」と同じものである」という一文が加わる。

<sup>254</sup> 英訳本では「例は数多くある」と訳す。

<sup>255</sup> 「大学」一章。ただし「大学」本文では「在止於至善」と「在」がある。

<sup>256</sup> 「大学」三章。ただし「大学」のこの部分は引用であり、元は『詩経』小雅・縣蠻。

yū k'ieōu yū “山の側に止まっている鳥について[いう]”<sup>257</sup>。「止於仁」<sup>258</sup>tchì yū gîn “仁愛の内に留まる”。「所惡<sup>259</sup>於右毋以交於左」<sup>260</sup>sò óu yu yeóu voú y kiāo yu tsò “右側にあるものの中であなたが気に入らないことを、左側にあるものに向かって同様にしてはならぬと知れ”。「好<sup>○</sup>善優於天下而況魯國乎」<sup>261</sup>háó chén yeōu yu t'ien hiá êll hoáng[sic] lòu kouě hou “徳を愛する者は誰であれ全世界で良く遇されるのだから、Lou<魯>の王国においてはよりよく[遇される]のではないか?” 1.「好<sup>○</sup>」は名詞として取ると何の意味も持たないので、動詞である。「好<sup>○</sup>善」“徳を愛する”。2.「於魯國乎」とは言わないものの、「於」を補った方がよい。すなわち「而況於魯國乎」とすることでより強く言うことができる。

第二に、その目的語に「於」を置かねばならない動詞には、私が努めて集めた多くの例がある<sup>262</sup>。「問於我」<sup>263</sup>vén yu ngò “彼は私に尋ねた”。「不求於人」<sup>264</sup>pou k'ieōu yu gîn “他人に頼らない”。Mong-tsee<孟子>[曰く、]「不得於言勿求於心不得於心勿求於氣」<sup>265</sup>pou tē yu yēn, oue k'ieōu yu sin, pou tē yu sin, oue k'ieōu yu k'í “あることについて、もし口に上せないならば、あなたは心から求めてはならない。もし心の中で思わないならば、思いが興るようにしてはならない”。この二つの文のうち、はじめの点は[孟子によって]非難され、もう一方は賞賛される。魂は追求されるべきであるが、情欲なしでなければならないのだ。「入於■」<sup>266</sup>gě yu t'ân “畏に落ちる”。「不見於經」 pou kién yu king “これは king<経>の諸書に現れていない”。「不道於聖人」<sup>267</sup>pou táo yu ching gîn “これについて聖人たちは何も言っていない”。「從於王」<sup>268</sup>ts'òng yu vâng “王に従う”。「害於性」<sup>269</sup>hái yu síng “これは天性を害し〜”。

第三に、分詞 yu は動詞に受動の意味を与える。「君子有物非有於物」 kiun tseè yeòu yu oue, fēi yeòu yu oue “知恵のある人は物を所有し、物に所有されない”。「勞心者治人、勞力者治於人、治於

<sup>257</sup> 英訳本では「彼女は山の陰で休んでいる」と訳す。

<sup>258</sup> 「大学」三章。

<sup>259</sup> 英訳本では右上に去声を示す圈点を加える。

<sup>260</sup> 「大学」十章。

<sup>261</sup> 『孟子』告子下。

<sup>262</sup> 英訳本は「「於」は対象或いは目的語の前に置かれなければならない」と訳す。

<sup>263</sup> 『論語』子罕の「有鄙夫問於我」か。

<sup>264</sup> 「中庸」十四章。

<sup>265</sup> 『孟子』公孫丑上。ただしこの引用部分は、孟子が告子はこのように言っていると述べたものである。

<sup>266</sup> 「入於坎窞」の形であれば『易経』習坎に見える。■は「穴+臼」。『易経』本文と英訳本は「窞」に作る。

<sup>267</sup> 「不道於孔子之徒」という形ならば欧陽修「易或問三種」に見える。

<sup>268</sup> 『周礼注疏』卷三十一疏。

<sup>269</sup> 『莊子』盜跖。

人者食人。治人者食於人」<sup>270</sup>laō sīn tchè t'chî (sic) gīn, laō lǐ tchè tchî (sic) yu gīn, t'chî (sic) yu gīn tchè ssée gīn, t'chî gīn tchè ssée yu gīn “精神力を用いる人々は統治し、体力のみを使う人は統治される。治められる人々は食物を供給し、統治する人々は供給される”。「有三年之愛於父母」<sup>271</sup>yeòu sān niēn tchi ngái yu fòu mòu “我々は我々の両親によって、愛情をもって3年にわたる教育を受けることとなった”。「寡人之於國也&c.」<sup>272</sup>ある王が Mong-tsee<孟子>に尋ねた。“私がわが王国に関わる限り～”。Ngheou-yang-tsee<歐陽子>は言う。「夫醫者之於病也」<sup>273</sup>gou y tchè tchi yu ping yè “病に対する医師たち”“彼らが人を直そうとする時”。最高の作家たち[の作品]においてしばしば見られるこうした形では、[「於」の]字はいつもこのように整えられる。

第五に、「於」yu は比較級として用いる。例えば「富於我」fóu yu ngò “彼は私より豊かだ”。「與」と「於」を混同せぬよう注意せよ。この小詞の区別は初めから誤りやすい。

第六に、代名詞あるいは名詞と結合して以下の意味になる。“私、君、彼にかかわることについて～”。「於我如浮雲」<sup>274</sup>yu ngò jū feòu yún “これらすべては、わたしにとっては風によって散らされた雲以上のものにはならない”。五文字の意味をあなたが表すのにどれだけのラテン語[が必要なことか]！「於女安乎」<sup>275</sup>yu jù (sic) ngan hou “君はこれで満足か？” Tchoiang-tsee<莊子>が尋ねている <sup>276</sup>。

第七に、時々ouとも読まれねばならず、その時は他の効果、すなわち驚嘆や願望を表す。Chi king<詩経>は言う、「文王在上於昭于天」<sup>277</sup>vén vâng tsái chàng, ou tchāo yu t'ien “Ven- vâng<文王>は高きにある、ああ天で何と輝いていることか！”と。

[驚嘆や願望を表すには]「於乎」ou hou もあるが、[「嗚呼」より]稀である。「於戲前王」<sup>278</sup>ou hou ts'ien vâng “ああ、古代の王たちよ！”も同様。[「於乎」は]「嗚呼」ou hou とほとんど同じだが、「嗚呼」は 悲しみ、つまり「哀傷」ngai chang としてよく[用いられる]。逆に「於戲」は 賞賛と驚嘆すなわち「嘆美」t'an moei である。辞書 Kang hi tsee tien<康熙字典>はそう[解説する]<sup>279</sup>。

<待続>

本稿は平成 26-27 年度科学研究費補助金 (基盤 C) 「欧文資料 *Notitia Linguae Sinicae* による清代中国語研究」(課題番号 26370509) による研究成果の一部である。

<sup>270</sup> 『孟子』滕文公上。

<sup>271</sup> 『論語』陽貨。ただし『論語』の原文は「有三年之愛於其父母乎」である。

<sup>272</sup> 『孟子』梁惠王上。なおここにローマ字標音はない。

<sup>273</sup> 欧陽修「本論」中。

<sup>274</sup> 『論語』述而。

<sup>275</sup> 『論語』陽貨。

<sup>276</sup> 莊子ではなく宰我の台詞である。

<sup>277</sup> 『詩経』大雅。

<sup>278</sup> 『詩経』周頌。また「大學」にも。ただしともに「於乎」に作る。英訳本は「於戲」に作る。

<sup>279</sup> 『康熙字典』も『正字通』もそうした使い分けを指摘していない。